
結婚症候群！

ヒタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚症候群！

【ZPDF】

Z6943Q

【作者名】

ヒタク

【あらすじ】

結婚症候群。通称マリー・シンдроーム。

この病気は女性ならば誰にでも発症する可能性のあるものであり、発症すると激しい心臓の動悸。急激なめまい。居ても立っても居られない何か義務感のようなものを感じる。

そしてこの病気の何といっても一番恐ろしいこと。それは病気を発症してから最初に見た異性と結婚しないと死んでしまうということだ

俺は坂井賢治。^{さかいけんじ}至つて普通で平凡でどうにかだつてありふれている高校一年生だ。あまりの普通で我ながらほれぼれするぜ、的な男である。

そんな俺だが、今の状態は正直、筆舌に喙くしがたいものがある。そこで俺を含めて状況が理解しやすいように一つ、いや二つほど現状を問題形式にして状況を分析していくと想つ。

第一に、何がどうだ？

いやいや、は確かに俺の家のはず。といつか俺の部屋だ。昨日はいつもよりも早くベッドに入つてぐっすりと寝たぐらいだし、寝不足で幻覚を見ているなんて不健康極まりないことは起こつていなければ。

だが、田に入つてくる情報はその事実を否定する。確かに窓から見える景色はいつもの俺の部屋だということを主張している。

しかしてその窓の内側の俺の部屋はとこつとこまた異常な光景が広がつていた。

（ここでちょっとばかし他の人に自慢できる俺の部屋を紹介しそう。

俺の部屋は何と十畳の広さを誇る。これだけで俺の部屋を自慢しきくなるところだが、まだまだ自慢できるところはある。

それは蔵書 漫画ともいう の数の多さだ！

俺の部屋にある漫……ではなくて蔵書はかなりの数であり、なんとその数は三千冊を超える。正直、部屋の大半を占めているのなんだ。

俺はこのことを誇りにしており、つい昨日も新たなる蔵書を仕入れてきたところだ。

だがしかし！

その我が自慢の蔵書達はその愛しい姿を夢か幻かのよつに消し、代わりに普通ではあまり見かけないよつな物が我が物顔で置かれていた。

それらの筆頭として挙げられる物 つまりは俺の部屋でより違和感を醸し出している物はいくつもあるのだが全部ではないが説明しようと思つ。

まずはテーブル。それは普通の卓袱台なら家に置いてある人もいるだろう。

だが、これはないと俺は断言できるー

それは 大理石のテーブルだ。

これを起きた直後見せられた俺の心境を少しは理解してもらえると嬉しい。

さすがにこんな物を今まで俺は見たことがなかつた。もちろん、現実でということだが。

そのテーブルの上には綺麗な花瓶が立てられており、その素晴らしい花を眺めながらここで食事をする者達には極上の至福を与えると思われる。

そしてこれまた異彩を放つていい物に机がある。

ただの机と侮ってはいけない。確かに最初こそ、この机は木でできているから普通の物かと俺も思つたがそんなことはなかつた！この机をよく見ればそれはすぐにわかる。何というか机の表面が黒光りしているのだ。

そしてあることがその大きさも俺が初めて小学校に入った時に

買つてもうつた学習机の少なくとも一倍はある。

こんな机の上にもまた既に置かれている物があった。そこに置いてある物を幾つか挙げると、可愛らしい装飾の付いた筆箱。買ったばかりと思われる教科書。そして勉強熱心な者たちが使うという聖書 別名・参考書 があるのだ！

俺には信じられない！ こんな物を机の上に置くなんてこと。

机とは蔵書を読破するための物ではなかつたのか！

他にも色々と場違いな物 僕の部屋的な意味で が置かれていたりするのだが、それらを紹介しているといつまでも続くことになりそうだ。ここらで一旦切り上げよう。

最後に最もこの部屋にとつて異色な物を取り上げたいと思つ。

それは ベッド。

勿論これもまた、ただのベッドなどではない。大きさは驚きのキングサイズ。布団やシーツや枕は極上の物を使つているのかふかふかで実に寝心地がいい。俺が今日、起きた時にいつも以上に目がさえていたのはこれだけ極上なベッドに寝たからだと俺は思つてゐる。

そしてそのベッドの上にはなんと天蓋がついている。全く勘弁してほしいぜ。俺はそんな少女趣味なんて持つていないとこのに。こんな普通ではあり得ないよつたベッドなのだが最期に紹介したのには実を言つと理由がある。

それはもう一つの問題にもかかわつてくる、いや問題そのものなのだが

「あれ？ もう起きていたんですか。……これからよろしくお願ひしますね、賢治さん」

このベッドの上にいる笑顔が眩しい金髪美少女は一体誰だといつのだ！？

その少女を説明するのに余計な言葉を使う必要はないと思つ。

ただ、圧倒的に綺麗なのだ。

だが、それでも細かく説明するとすればまず、髪はやさしきも述べたように金髪。丁寧に手入れをしているのか寝起きだとこの間に全くはねている所がない。むしろ髪全体が輝いているような感覚である。

そして顔は白磁のような綺麗な肌。その上に綺麗なサファイアを乗せたかのようなこれまた美しい青い目。目の下にある鼻は端正であり、少し高いそれは頭の良さも醸し出しているような気がする。そして口。それはふつくらとした美しい薄桃色の唇。先ほど話す際に見えた歯は並びが整っており、口の中でちゃんと非の打ちようがないそうだ。

声さえも透き通るようで耳に心地が良い。

着ている寝間着も思わず目をそらしたくなるほどの可愛らしさを見せつけていた。

そんな俺が今まで見たことがないような美少女なのだが、一つ疑問がある。

何故ここにいる！？

俺の心がざわめき、焦り始めた時、少女は口を開いた。

「いきなり押しかけてすみません！私の名前はマリ・ル＝ベルトラン。結婚症候群を発症してしまってからあなたのことを見てしました」

「……」で一度、美少女は俺の方を向きながらも顔を赤く染める。

「なので私と
結婚してください！」

言い終わつてから、さらに顔を赤くしながらも私のことはマリーとでも呼んでくださいね、などと綺麗な笑顔を見せる少女、マリー。俺は突然の告白に驚き過ぎて頭の中が真っ白になってしまった。

結婚症候群。 通称マリー・シンドローム。

「この病気は女性ならば誰にでも発症する可能性のあるものであり、発症すると激しい心臓の動悸。急激なめまい。居ても立つても居られない何か義務感のようなものを感じる。

そして「この病気の何といつても一翻恐ろしい」と。それは病気を発症してから最初に見た異性と結婚しないと死んでしまうといつことだ

「はああああああああああああああああああああ？」

俺はマリーの言つことに心底驚いた。

何せ、結婚症候群は女性なら誰にでもかかる可能性のある病気とはいっても、この病気は滅多にかかる事はないのだ。

具体的に書くと、一千万人に一人という绝望的な数字だ。

それでも何故俺のようなくじく普通な高校生がこんなマイナーな病気を知っているのかといつて、この病気にかかると結婚しないと死ぬ　といつてこの元原因是ある。

実際に馬鹿げたあほらしい症状だ。俺も実際にそう思う。そして、テレビ局がこんなネタにできそうな面白なことを見逃すはず

がない。

そんなわけでこの病気は発症件数の少なさの割合でテレビで放映される病気である。俺もテレビでよくこの病気のことを見るからこそ、存在を知っていたというわけだ。

だがしかし、いくら俺でもこんな美少女が俺の所に来るなんてことは信じられない。

それも俺のことを最初に見たから結婚してくれだ？ 俺に都合が良すぎていつドッキリでした、というカメラが入ってくるのか待ち構えたくなる。むしろ、もうすでに周りをうかがっている俺がいたりする。

「本当なんですよー なんなら私のこりを見てくださいー！」

マリーが必死になつて言つたが、こんなさえない俺の所に来るなんて……。

どうしようもなく信じられず、ループし続ける俺の思考が見えたのかマリーが俺に言つた。

「本当なんですよー なんなら私のこりを見てくださいー！」

ぶふおつ、思わず吹いてしまった。

マリーは俺にその豊かな胸を突き出していく。

この青春真っ盛りの純情すぎる俺のことを知つての狼藉か！

頭の中はそんな訳も分からぬ思考に支配され、ぐるぐると迷走をし続ける。

「ほひ、ひー！」

マリーは俺に変わらず胸を突き出していく。俺はそれを目に入れることを拒否する。

俺に、俺にそんな恥ずかしい所を見せないでくれ ツ。

「ほひ、ほひですよー。この首筋の所ですー。ほひほひの部位があるでしょー。」

え？

ビーグール。落ちつけ。しつかりとしろ。倒れるなよ、俺！
俺の思考を支配していたピンク色の渦はいつの間にかどこかに消え去っていた。

俺はマリーが指で示している首筋の所を見てみた。
確かにそこにはしっかりとマークがついている。とかく浮き出でている。

その部分はちょっとだけ皮膚が盛り上がっており、の字型の形を作っていた。

確かにテレビで結婚症候群にかかった女性は首筋にマークができると聞いたことがあった。同じように男にもマークが首筋にできているとも。

俺は咄嗟に鏡台 これも前にはなかつた に向かい、着ている寝間着の首筋辺りの布を下にあらし、鏡に映した。

結果として、俺の首筋にもバツチリとマークが浮かび上がっていることを確認できた。

「本当に、結婚症候群なの、か……？」
「はい！だから、これからよひよひお願いしますね。賢治さんー。」

マリーの弾むよつな声が俺の頭の中に響き、俺は信じられないといつ気持ちが頭の中を渦巻いていた。

(後書き)

意見・感想・誤字報告ありましたら教えてくださいると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6943q/>

結婚症候群！

2011年8月20日15時07分発行